

国内の日本語教育における非母語話者教師に関する考察
—多文化共生社会における語学教師の多様性を問う—

高橋雅子（青山学院大学）

View of Japanese-language education in Japan by non-native teachers :

Proposal for diversification of language teachers
in multicultural symbiotic societies

Masako TAKAHASHI(Aoyama Gakuin University)

キーワード： 日本語教育, 非母語話者教師, 語学教師の多様性, 多文化共生社会

Keywords : Japanese language education, non-native teacher,
diversification of language teachers, multicultural symbiotic societies

SUMMARY

In the field of Japanese language education in Japan, however, almost all teachers are Japanese native speaker and are of Japanese nationality. This paper focuses on an interview survey with non-native teachers in Japan. Citing their own experiences, all interviewees show their awareness that their skills specific to the teaching of Japanese and their personality traits are more important for language teachers than their nationality or native language.

1. はじめに

国際化の流れにより日本で生活・就労する外国人が増え、日本は多文化共生社会に向かっている。日本政府・総務省は、「多文化共生の推進に関する研究会」（2006）の報告書で「地域における多文化共生」を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義している。

そのような背景のもと、日本語教育の分野でも多文化共生社会が取り上げられている。岡崎（2007）では、「外国人に対する同化要請として機能しがちな従来の日本語教育の在り方を再考し、新たに地域の日本住民と外国人住民が互いをコミュニケーションの当事者として、その方法を学び合う」ことを「共生日本語教育」とした。さらに、上述の岡崎（2007）では、「共生日本語教育」の教員養成と教室実習を行い、そこに参加する非母語話者の教育実習生について、「自らを母語話者との対比において異質性と

して認識するのではなく、母語話者をも含む様々の実習生の持つ多様性として理解して受容し、さらにより広い視野を獲得することが目指される」と述べている。

しかしながら、日本語教育の多様性が謳われても、国内の日本語教育において、非母語話者の日本語教師（non-native teacher 以下、NNT と略称）について述べられることは少ない。石井（1996）では、「日本国内では相変わらず「日本人教師」という認識が非常に強く、現実に世界の日本語教育機関には非常に多くの非日本人・非日本語母語話者である教師が存在するにもかかわらず、教師の多様性についての議論はほとんど表に出てきていない」と述べている。また、野々口（2007）でも、「日本国内における日本語教師は「日本人教師」が圧倒的多数であり、学習者の多様化は議論されても、教師の多様化が取り上げられることはほとんどない」と指摘している。これは、「日本国内で日本語教育を行うなら教師は日本語母語話者であること」が前提とされ、「日本語非母語話者が日本語を教えたければ自国で教えればよい」という意識が日本国内の日本語教育にあるからではないだろうか。

このような状況を踏まえ、本稿では、少数派とされている国内の日本語教育に携わっている NNT に焦点をあてる。ボランティアや教育実習生ではない、職業として日本語教育を行っている NNT にインタビュー調査を行った。インタビュー内容を質的に分析し、そこから見えた NNT の意識の考察から、共生社会における語学教師の多様性について再考したい。

2. 本稿の背景

2.1 海外の日本語教育における非母語話者教師と母語話者教師

国際交流基金の 2012 年度の日本語教育機関調査によれば、世界の日本語教師の数は 63,805 名で、うち NNT は約 7 割を占めており、海外の日本語教育の現場では NNT は多数派の存在である。教育機関によって教え方や教師の役割はさまざまであるが、日本語母語話者教師（Native Teacher、以下「NT」と略称）がいる機関では、NNT と NT によるチームティーチングの形態で日本語教育を行うことが多い。

高橋（2010）では、ベトナムでチームティーチングを行っている日本語教育機関・クラスを調査し、チームティーチングのタイプを 6 つに分類した（表 1）。

表 1 ティームティーチングのタイプ（高橋(2010)より）

	教師の教室の入り方	教師の役割・担当
NT 同士の TT	教師が一人	教室活動の全てを行う
NNT 同士の TT	教師が一人	教室活動の全てを行う
NNT と NT の TT	教師が一人	NNT が文法・NT が会話担当、技能別役割分担
		時間・曜日ごとに担当、技能別の役割分担無し
	NNT と NT が同時に教室に入る	NNT の授業に NT がアシスタント
		NT の授業に NNT がアシスタント

表1のティームティーチングにおける「教師の役割・担当」で、「技能別役割分担」を見ると、「NNTが文法・NTが会話担当」となっている。これは、NNTとNTのティームティーチングにおいて教師の役割は、国籍・母語によって固定化されることを示していると言えよう。

2.2 国内の日本語教育における非母語話者教師

日本で働く外国人の数は年々増えている。厚生労働省の2013年の調査によると717,504人の外国人が日本で就労している。また、法務省入国管理局の2013年の報告によると、「留学」および「就学」の在留資格を有する外国人留学生在が日本の企業等への就職を目的として、在留資格変更許可申請を行った件数は112,793人で、そのうち許可数は11,647人であった。これは、前年の許可数より678人の増加である。

日本で就職・就労する外国人の数は年々増えているが、日本語教育の分野では外国人日本語教師の正確な数の把握はされていない。文化庁の「平成24年度日本語教育実態調査」によると、国内の日本語教師数は34,392人と報告されている。その内訳として「常勤講師」・「非常勤講師」・「ボランティア等」の項目があるが、それらの教師がNTであるかNNTであるかは触れられていない。今日、企業が外国人を採用する動きが出ている中、国内の日本語教育の現場においてボランティアや大学生・大学院生の教育実習生という立場ではなく、給料を得ている「職業としての日本語教師」のNNTはまだ「珍しい」存在であろうと思われる。

3. 国内の日本語教育における非母語話者教師の先行研究

日本国内の日本語教育におけるNNTの研究は数が少なく、大学生・大学院生の教育実習生（古市，2007；野々口，2007）や、海外の教育機関に所属し研修で来日しているNNT（木谷・築島，2005；久保田，2006；八田，2009；横山，2005・2007等）を対象にしているものが多い。

阿部・横山（1991）では、NNTの利点として、学習者と母語や文化的背景を共有し、日本語の学習経験があることを挙げ、母語による指示や学習経験を生かした指導ができることを述べている。

古市（2005）では、国内の大学で共生日本語教育の実習を行った非母語話者の大学院生の語りを分析し、認知面・情意面・社会面におけるNNTの役割を明らかにした。その役割について「国内における共生日本語教育では、非母語話者実習生が多様な役割を担うことができ、それは非母語話者実習生だからこそ担える役割であることが示唆された」と述べている。

黄・胡（2014）は、国内の日本語教育現場ではNNTの雇用が少ない現状を踏まえたうえで、国内の日本語学校に勤務する中国出身のNNTを対象に調査を行った。その結果、勤務当初は日本語の能力等に不安があったNNTも現場における実践の中で成長が見られ、「教師と学習者の共通言語（中国語）」の可能性を見出したとしている。

辛（2006）では、国内の大学で勤務するNNTのビリーフの変容について述べている。

教え始めの当初は規範的な日本語・日本語教育・教師像を持っていた NNT が現場を経験することにより、不安や葛藤を内在しながらも自己を肯定的に捉えるようになったことを明らかにした。

上述の古市（2005）及び、黄・胡（2014）の研究や、辛（2006・2010a・2010b）の一連の研究の調査対象者である NNT は大学院在籍者である。日本語教師という職業のみで日本に滞在している NNT ではない。特に辛（2010b）では、調査対象の NNT の滞在資格が留学であり、いずれ帰国するという語りを引用し、NNT 自身が国内現場における自分の立場を「部外者」と位置付けていることにも言及している。

また、調査対象者の NNT の日本国内での日本語教師歴は、古市（2005）は無し、黄・胡（2014）では半年から 1 年半、辛（2006・2010a・2010b）では教師経験無し、もしくは教師経験が浅いとなっている。これらの研究では、NNT が教授能力に自信を持っていないことを述べている。しかし、経験が浅い教師が教授能力に自信がないのは NNT でも NT でも同様の傾向なのではないだろうか。ある程度の教師経験を持った NNT でも教授能力に自信を持っていないと言えるであろうか。このような研究動向を踏まえ、本稿ではある程度の教師経験があり、かつ職業として日本語教育に携わっている NNT を調査対象とした。

4. 調査

4.1 調査方法および調査協力者

調査は半構造化の形式でインタビューを実施した。インタビューの質問は主に「教師としての経験」、「自分が NNT と感じた／感じる時」、「日本語を教える際に NT の優位性²はあると思うか」、「日本国内と海外の日本語教育現場における NNT と NT の役割の違い」等で、調査者と 1 対 1 で、1～2 時間半程度実施した。インタビューの内容は調査協力者の了承のもと全て録音した。また、必要に応じて、後日追加のインタビューやメールのやり取りを行った。

調査協力者三人の内訳を表 2 に示す。

表 2 調査協力者の概要

	性別	年代	国籍	教師歴
A	女	40 代	中国	10 年（日本 6 年、中国 4 年）
B	女	30 代	中国	5 年（日本のみ）
C	女	40 代	韓国	3 年 6 か月（日本のみ）

三名とも日本国内の大学で留学生対象の日本語クラスを担当している。クラスのレベルは初級と中級である。初級レベルは複数の教師が一つのクラスを曜日ごとに担当するチームティーチングの形式を取っている。中級レベルは文法・作文・読解等、技能ごとに分かれているクラスを担当している。担当クラスの学習者が多国籍のため、授業は基本的に直接法で行っている。

なおBさんは大学で教える前、国内の日本語学校で日本語教師をしていた経験もあり、その際も多国籍の学習者のクラスで直接法を用いてクラスを担当していた。

4.2 分析方法

インタビューの内容は全て文字化し、分析のデータとした。

まず、三人それぞれのデータを個別に分析した。データを内容の話題ごとに分断し、カテゴリーに分けた。それをデータのテキスト内の表現を用いてコード化し、相関図を作成した。相関図をもとに、各自のストーリーを再構築した(5.1-5.3)。

次に三人全員のデータから共通するカテゴリーや関連のあるカテゴリーを表にし、三人の意識を比較した(6、表3)。

5. 三人のストーリー

5.1 Aさん

Aさんは教師として新人の頃は気合を入れて授業に臨んでいた。しかし、現在は変な気負いがなく心に余裕が出てきた。授業中に学習者から答えられない質問があった際には、素直に「わからないから次回の授業で説明する」と言えるようになった。これは、日本人の日本語も完璧でないと気が付いたことと、NTでも教え方が下手な人がいること、そして職場の環境や業務内容に慣れたことにより心の余裕が出来たからだ。授業では自身が日本語学習者だった経験をもとに、学習者目線で理解しにくい文型や表現などを説明している。

Aさんは自身がNNTであることを認めつつも、NNTとNTは教師としては同じ存在だとし、教える際のNTの優位性も感じていない。また、NTから教え方について口出しをされたことはない。これは自分の教師経験が長いからだからだと考えている。他の教師から口出しをしてもらえるのは新人教師の特権である。

教授上の役割分担をNNTかNTかで区別することは不要で、国籍ではなく個人の特性を活かして教えるのが良いと考えている。そのためには一教師としての自覚を持つことが大切だとしている。

初回の授業で自己紹介をした際、学習者は教師が日本人でないことに驚きはしたが、良い・悪いという反応はなかった。日本語教師志望の日本人の大学生がボランティアとして授業に参加した際に、板書で漢字を間違えるという出来事があった。学習者は日本人でも漢字を間違えることを目の当たりにし、国籍・母語ではなく教え方で教師を判断するようになった。

5.2 Bさん

日本で就職活動をしていた時、何校もの日本語学校で不採用になった。この経験からNNTであることに若干コンプレックスを持つようになった。初めて採用された日本語学校ではNTの優位性を感じていた。自分は文法の正誤判断を直感的にできない、発音が不自然、作文添削が上手くできないことなどで、他の教師に迷惑をかけているのではないかと卑屈になっていた。

しかし、仕事に慣れてくると同僚の教師を NT として見るのではなく、ひとりの人間として見るようになった。教師になったばかりの頃は中国人の特性を活かした教え方をしようとしていたが、今は「私が学習者だったらこう教えてほしい」と、「私」という視点を持つようになった。今は自分が NNT であると感じるときもない。

また、自身が日本語学習者であった経験を授業で話すことはしない。自分が学習者であったのはずいぶん前のことで、時代の流れと共に学習者を取り巻く環境は変化しているからだ。

今は NT の優位性を感じていない。日本語を教える一方で、母語である中国語を日本人に教える仕事をしているが、その際に NT としてのメリットを感じたことが一度もないからだ。語学教師は母語話者かどうかではなく、その言語や教授に関する知識をどのくらい持っているかが重要である。

A さん同様、初回の授業で自己紹介をした際、学習者は教師が日本人でないことに驚きはしたが、マイナスの反応はなかった。年々、学習者の驚く反応が薄くなっている。これは国際化が進むにつれ、NNT を受け入れるような理解が学習者側にあるからだと考えている。

5.3 C さん

NNT と NT の国籍・母語が違うのは事実であるが、NT の優位性はなく、NNT も NT も教師として同じだと考えている。しかし、周囲の教師はそうは思っていないようだ。NT は必要以上に自分の授業に干渉してくるし、同僚の NNT は愚痴ばかり言っている。日本人でも自分より語彙力が貧弱な人はいるし、NT でも人間的におかしな人がいる。NNT・NT による役割分担ではなく、できる人がやれることをすればいいと思う。ただし、教師は経験・努力・能力が重要で、教育に関する専門性は必須である。

新人教師のころから NNT としての負い目はなかった。自分に足りないものがあれば、別のもので補えばいいと考えているからである。日本語学習者としての経験も授業に有効であれば話す。最近仕事に慣れてきたので、以前に比べると気持ちが楽に感じることもある。

学習者からの反応は良いも悪いもない。学習者は教師の教え方を見て評価をしていると思う。

6. 三人の意識の比較

表 3 は三人の意識の比較を示したものである。

三人は教師としての経験を積み、職場環境や業務に慣れてくると気持ちが楽になり、教師を国籍・母語ではなく「一教師」、「人間」と考えるようになった。また、三人とも現時点で NT の優位性を感じておらず、各個人の特性が教える際の強みになると捉えている。

三人ともかつて自身が日本語学習者であったことに関して言及している。A さんと C さんが自身の学習経験を授業で学習者に話しているのに対し、B さんは学習経験を

話さないとしている。NNT に関する先行研究の多くは「NNT は学習者としての経験がある。この経験は教える際に有利になる」、「学習者と共通の媒介語や背景があるなら有効に使うべきだ」としているが、三人は自身の日本語の学習経験や教える際に母語・媒介語をどう使うかを自分の意志で選択している。

学習者からは、初回の授業で驚かれはしたものの、その後 NNT を理由とした特別な反応は感じていない。これは三人が、教師は国籍・母語ではなく教え方で学習者が評価されるという考えを持っているからである。

表3 三人の意識の比較

	Aさん	Bさん	Cさん
NNT と NT の違い	NNT も NT も教師として同じ、役割分担は不要、NT の優位はない		
	国籍ではなく個人の特性を活かして教えれば良い	国籍ではなく人間として見ている	国籍・母語が違うのは事実 教師としては同じ
教師として大切なこと	一教師としての自覚を持つことが大切	日本語や日本語教育に関する知識をどのくらい持っているか	能力・経験・努力が重要 教育に関する専門性は必須
新人教師の頃	新人教師の頃は気合を入れて授業をしていた	就職活動での不採用の経験から卑屈になっていた 中国人の特性を活かした教え方	新人のことから NNT としての負い目はなかった
現在の考え・状況	変な気負いが無い 分からないことは分からないと素直に言える	「私が学習者だったらこう教えてほしい」という視点を持つようになった	できる人がやれることをすればいい
	NT でも教えるのが下手な人がいる 日本人の日本語も完璧ではない	自分が NNT と感じることはない 中国語を教えるときに NT としてのメリットがない	色々な教師がいて多様性があることが良い
	職場の環境や業務に慣れて楽になった、気持ちに余裕が出来た		
学習者としての自分の経験	自身が日本語学習者だった経験をもとに、学習者目線で理解しにくい文型や表現などを説明している	授業で話さない 自分が学習者だった時と今は環境が違う	授業で話す

学習者からの反応	日本人でも漢字を間違える 国籍・母語ではなく教え方で 教師を評価している	学習者は教育現場の国 際化に順応している	教え方で教師を評価 している
----------	--	-------------------------	-------------------

7. まとめと提言

阿部・横山(1991)等の先行研究から、調査前の仮説として、NNTは自身の存在を「学習者のロールモデル」、「日本語を外国語として捉えて教えることができる立場」とポジティブに捉えている反面、「NNTである不安」を感じていると予想していた。

しかし、今回の調査協力者はNNTである気負いがなく、「NTもNNTも教師として同じ」、「母語話者だからといって教師として優位性があるわけではない」、「個人の専門性や人間性で教師としての力量が決まる」という考えを持っていた。また、担当した学習者からはNNTだからといってNTと区別されるような特別な反応はなかったという。このような意識は、教師としての経験や国内の現場・業務の慣れからくる気持ちの余裕が要因の一つであることがわかった。

また、教室の現場の当事者であるNNTと学習者は、国籍や母語によって教師を区別しておらず、教授能力で教師をみていることが明らかになった。

日本語教師としてNNTが教育に携わるのは出身国だけではない。今後、多文化共生社会の流れに伴い、日本語国内の日本語教育の現場でもNNTの存在は珍しいものではなくなるであろう。NNTとNTは国籍や母語が異なることは事実である。先行研究では、「母語話者の優位性」を否定しているものもあるが、結論としてNNTの役割に言及しているものがほとんどであり、結局は国籍・母語による役割を与えているのである。

国籍・母語によって語学教師の役割を決めるのではなく、一個人としての特徴をもった教師の多様性を認めることが今後の日本語教育を含む語学教育で考えていくべき課題の一つであろう。同じ語学教育の分野で働く教師の一員として、教師の研究を今後も続けてきたいと思う。

注

- 1 本論文は、社会言語科学会第34回研究大会(立命館アジア太平洋大学2014年9月)において発表したものに加筆修正を施したものである。
- 2 平畑(2007・2008)では、母語話者の優位性について詳しく述べている。

参考文献

- 阿部洋子・横山紀子(1991). 「海外日本語教師長期研修の課題－外国人日本語教師の利点を生かした教授法を求めて－」. 『日本語国際センター』 1:53-74.
- 石井恵理子(1996). 「非母語話者教師の役割」. 『日本語』 15:2,87-94.
- 岡崎眸(2007). 『共生日本語教育学』. 雄松堂出版.
- 木谷直之・築島史恵(2005). 「大学院修士課程におけるノンネイティブ現職日本語教

- 師の意識変化－学生のジャーナルの分析を通して－. 『国際交流基金日本語教育紀要』 1:21-36.
- 久保田美子 (2006). 「ノンネイティブ日本語教師のビリーフ－因子分析に見る「正確さ志向」と「豊かさ志向」－. 『日本語教育』 130:90-99.
- 黄均鈞・胡芸群 (2014). 「日本語学校におけるノンネイティブ教師の成長を問う－3名の中国人日本語教師への事例研究から－」 2014年度日本語教育学会春季大会予稿集. 357-358.
- 厚生労働省(2009). 「「外国人雇用状況」の届出状況まとめ(平成25年10月末現在)」. 法務省. 2014年12月5日検索.
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000036114.html>
- 辛銀眞 (2006). 「日本国内の非母語話者日本語教師に対する学習者のビリーフの変容－早稲田の初級実践を通して－. 『講座日本語教育』(早稲田大学日本語教育研究センター) 42:60-81.
- 辛銀眞 (2010a). 「国内現職非母語話者日本語教師に求められる資質と教育能力－ティームティーチング授業における現場参加者の不安と期待から」 社会言語科学会第25回大会発表論文集. 62-65.
- 辛銀眞 (2010b). 「国内非母語話者日本語教師の実践－現場参加者の協働に向けて－」 第19回小出記念日本語教育研究会発表論文集. 35-38.
- 総務省(2006). 「多文化共生の推進に関する研究会報告書－地域における多文化共生の推進に向けて－」. 総務省. 2014年12月5日検索.
http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf
- 高橋雅子(2010). 「教師間でビリーフの共有を行った教室活動－ベトナムにおけるノンネイティブ教師とネイティブ教師によるティームティーチングでの実践－. 『日本語研究』(韓国・中央大学校日本研究所) 28, 181-197
- 独立行政法人国際交流基金 (2013). 『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』 くろしお出版.
- 野々口ちとせ (2007). 「非母語話者実習生の自己受容－内政モデルに基づく共生日本語共生日本語実習の場合－. 岡崎眸(監修)『共生日本語教育学』 115-126. 雄松堂出版.
- 八田直美 (2009). 「ノンネイティブ教師にとっての「教師の成長」－訪日研修参加者へのインタビュー調査から－. 水谷修(監修)『日本語教育の過去・現在・未来 第2巻 教師』 159-180. 凡人社.
- 平畑奈美(2007). 「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質－グラウンデッド・セオリーによる分析から」. 『早稲田大学日本語教育研究』 10:31-44
- 平畑奈美 (2008). 「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割－母語話者性と日本人性の視点から－. 『世界の日本語教育』 18:1-19.
- 古市由美子(2005). 「多言語多文化共生日本語教育実習を通してみた非母語話者教師の役割」. 『小出記念日本語教育研究会論文集』 13: 23-35
- 文化庁(2012). 「平成24年度国内の日本語教育の概要」. 文化庁. 2014年12月1日検索.

http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h24/gaiyou.html

法務省入国管理局(2013). 「平成25年における留学生等の日本企業等への就職状況について」. 法務省. 2014年12月5日検索.

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri07_00080.html

横山紀子 (2005). 「第2言語教育における教師教育研究の概観－非母語話者現職教師を対象とした研究に焦点を当てて」. 『国際交流基金日本語教育紀要』 1:1-19.

横山紀子 (2007). 「非母語話者教師の目標言語学習が学習観・指導観に及ぼす影響－再教育における聴解学習に関する実証的研究－」. 『日本語教育』 132:98-107.